

公開講演会記録

新型コロナからの伝言

— 破滅から再生への時代を迎えるために

元フジテレビアナウンサー、フリーアナウンサー 山川建夫



地球をわがもの顔で引っかき回してきた私たち現代人の前に、忽然と姿を現した「新型コロナ」。

恐れおののく現代人。その様子を眺めていて、新型コロナが現代人の写し鏡だと気付きました。新型コロナの中に自身姿を見ているのです。

新型コロナに写った自分の姿に恐れおののくのではなく、恐れおののいている己れの姿を徹底的に見つめ、何を恐れているのかを知る時です。

新型コロナは自分自身！

ならば自分自身を恐れ否定するのではなく、コロナを通して自分を認め、自分を丸ごと肯定し、大切にし、心底自分を愛する時です。全面的な自己肯定ができた時、コロナを受け入れ、コロナを通して

て自然とつながり、地球とひとつになれるのです。そうなった時、はじめて地球がコロナを通して伝えたかったことが腑に落ちるのです。

それは、地球のいのちと現代人のいのち、全てのいのちはつながっているという事実への気付き。地球上の全てのいのち、全ての存在が対等であり、お互いの存在が有機的につながって、地球という大きな生命体の中に生かされているという事実からもたらされる安堵感、充実感。

母なる惑星、地球の愛に包まれた喜びの時代を迎えるために遣わされた新型コロナに感謝です。さあ、新型コロナに導かれて、私たちにつながる全てのいのちが喜びにあふれる時代へ向けて、旅立ちましょう！

新型コロナが、ひとつの明確なメッセージを携えて、私たち現代人の前に現れました。

自然界と、人間界との「和解」です。昨年末、新型コロナウィルスに関しては、ありとあらゆるメディアから、実に様々な「情報」が発信されました。この時代、どの情報が本当なのかよく分からなくなってしまうましたが、ひとつだけはっきりしているのは、新型コロナに対する私たち現代人の向き合い方です。

「コロナに打ち勝とう！ コロナに負けるな！ コロナを排除しろ！」。

まるで、新型コロナを地球から追い出すような勢いです。マスメディアからは連日、新型コロナによるとされる世界中

の感染者と死者の数が発表され、日々、上昇していきます。その上昇カーブとシンクロして新型コロナウイルスに対する不安も増し、いまや世界中がある種の鬱状態を呈しているように見えます。

言うまでもありませんが、ウイルスは自然界の一員であり、この地球では私たち人間よりはるかに大先輩です。ウイルスはその構造上、ほかの生きものの細胞に取り付いて増殖し、生き延びてきました。やがて、取り付いた生きものとの間に共存関係が成立し、お互いに共生してきました。人間もこれまで、数え切れないほどのウイルスによる洗礼を受けてきました。その都度生き延びてきました。「パンデミック」を起こす微生物に対する免疫力の獲得、感染症に一網打尽にされない生物多様性のお陰でした。そうした自然界と人間界との関係性がこのところ急激に変わってきたのです。生態系と呼ばれる地球の生きもののネットワークの循環から人間だけが抜け出し、あるうことか自然界を支配しようとしたのです。地球の生態系の一員であることを忘れ、地球そのものを自分たち人間のものとして勘違いし、地球を搾取の対象として、掘り出し、削り取り、商品に変え、マネーに変えて、ひたすら経済を発

展させてきました。

その経済活動の過程で起こる土壌や水や大気の汚染を放置したまま、この地球上に暮らす様々な生きものも生存条件を損ない、毎年夥しい数の生きものたちが、永久にこの惑星から姿を消すところまで来てしまいました。

このたびの新型コロナウイルスに関しても様々なことが言われていますが、その中で比較的納得できそうなのが、野生動物由来説です。新型コロナウイルスは元々、オコウモリの体内で共生していたものが、何らかの原因で環境中に放出されたのではないかというものです。

1970年代からアフリカ中西部のコンゴ川流域で巨大開発が行われ、熱帯森林の年輪を重ねた大木が次々に薙ぎ倒されていく過程で、森の奥の洞窟の中にひっそりと生息していたオコウモリが棲み処を追われ、外の世界に現れた時、その体内に共存していた、後に新型コロナと呼ばれるウイルスも、環境中に放出されたと言われています。

1980年代に入り、京都大学の前の総長である山極壽一さんが、ゴリラの生態を研究するため現地調査をしている時、ジャングルの中で十数頭のゴリラの群れが折り重なるように死んでいた現場

に遭遇した際のレポートは鬼気迫るものがありました。その時のウイルスはエボラ出血熱と呼ばれるものでした。その後SARS、MERS、そして今回の新型コロナウイルスに到るまで、呼吸器に取り付く感染症として続いているというのです。

この説が正しいとすれば、感染症は単独で発生するのではなく、人間界との相互作用の中で発生すると言えます。それまでウイルスたちが穏やかに生息していた環境を、人間の側の一方的な介入によって破壊したためだということになります。私たち現代人が、新型コロナウイルスによる一方的な被害者のように騒いでいますが、元をただせば、その原因は人間の側にあったのです。

この国のアイヌの方々のように、自然界に対する畏敬の念のもと、地球の循環の中で暮らしてきた先住民と言われる人々の真逆の、地球を自分たちの「資源」として切り刻み、掘り返してきた私たち現代人の目を覚ますために新型コロナは現れたのです。

もう、新型コロナと戦うのは止めましょう。新型コロナが所属する自然界と戦うのは止めましょう。それは、同じ自然界に属する人間自身と戦うことでもあるのですから。それが、自然界と人間と

の「和解」なのです。

新型コロナ登場以前から、地球は私たち現代人の目を覚ますため、様々なメッセージを送り続けてきました。

自分自身のことでは、今から36年前に生まれ育った東京を離れ、房総丘陵の里山の麓に建った大正時代の古家と出会い、家族の食べるものを自給する暮らしに入ってから、米づくりのための田んぼ仕事を通して、定点観測的に自然をウォッチングしてきました。

その中で、田んぼを中心とした生きものの種類と数が見えて減少し、同時に、気候の急激な変化を目のあたりにして、それまでのアタマの中だけの地球環境の危機的な状況を、文字通り自分の全存在を通して実感したのです。そして、私たち現代人の地球に対する破壊的な関係性を直ちに変えなければいけないと痛感したのです。しかし、そうした切実な思いと現実の人間社会とのあまりのギャップに、しばしば絶望的な気持ちになったものでした。

そこで、起こったのが東日本大震災でした。地震、津波、原発事故。それまでの、自然に対する私たち現代人の破壊的な暮らしを根本的に改める大きなキッカケでした。でも、私たちは、それに気づ

きませず、たちまちそれまでの物質に偏った現代文明の渦の中に引き戻されていきました。

折角の気付きのチャンスを失いかけた私たちに対して、自然界は、震災以降、異常気象と呼ばれる気候変動の激しさを増していきました。これまでの記録を覆すような「自然災害」が頻発するようになったのです。

2014年6月、旅の途中で立ち寄った北海道の支笏湖の山小屋に宿をお借りした晩のことです。日没から降り始めた雨が次第に激しさを増し、夜更けとともに、まるで屋根が抜け落ちてくるのではないかという激しさで、あたかも滝の真下にいるような轟音とともに打ちつけてきたのです。停電で真の闇の中、このまま雨が降り続いたらどうなってしまうのだろうという、生まれて初めて経験する未知の不安の中で、まんじりともせず、夜を過ごしました。幸い、夜明けとともに雨脚も衰え始め、助かったと思えました。翌日、支笏湖周辺の道路は悉く水没し、何日も孤立する地区もありました。

札幌市南区から支笏湖にかけての豪雨は、1時間に100ミリを超え、それが5時間も降り続いたのです。この経験のお陰で、その後、1時間雨量が100ミ

リを超えたというニュースに触れるたびに、その激しさをまさに実感として受け取れるようになりました。

この経験から、全国で発生する激しい豪雨にリアルに反応するようになり、その現場を自分の眼で確認しなければと思うようになりました。折りしも、支笏湖の豪雨から2か月後、広島市安佐南区から安佐北区にかけて集中豪雨があり、新興住宅地が丸ごと土石流に呑み込まれ、77名の住民がなくなるという自然災害が起こりました。ちょうどその日、大阪に滞在していたので、翌日、広島へ向かいました。その現場は、こんなところを宅地開発してよかったのかというほどの傾斜地でした。人災以外の何ものでもないと感じました。

翌、2015年9月の関東・東北豪雨。その翌々年、2017年7月の「九州北部豪雨」。福岡県朝倉市から大分県日田市にかけて、線状降水帯が駆け抜けた。12時間雨量、900ミリ！ 3時間雨量400ミリ！ 朝倉市の山の中に建つ廃校になった小学校を利用したアトスペースに何度かお邪魔して、ある程度、地形が分かっていたので、後日、現地を訪れた時、余りの変わりように言葉が出ませんでした。自然のパワーの前に

ただただひれ伏すばかりでした。

東日本大震災の年には2つの大きな水害がありました。7月の「新潟・福島豪雨」。9月の「紀伊半島豪雨」。両方とも後日、現地を訪れることができませんでした。前者は福島県金山町に行った時、只見線の鉄橋が押し流された現場を目のあたりにしました。後者は、奈良県から和歌山県にかけての水害。新宮市で1時間雨量130ミリを記録。熊野川の水位が20メートルにせまったこと。100人以上の方が亡くなったことをあとで知りましたが、水害の翌年、田辺市から新宮市へ抜ける国道を走っている時、木々の先端に引っ掛かっているブルーシートをしばしば見掛けました。あんな高い所に何で？ と思いました。洪水当時の熊野川の水位を知って納得しました。

そして、その翌年2018年8月の「西日本豪雨」。愛媛県から広島、岡山県と、何本もの線状降水帯が西日本を通過していきました。その雨量は、平成最大の広域水害と呼ばれるほど、とてつもないものでしたが、その豪雨の供給源が、従来の太平洋上の水蒸気だけでなく、インド洋上の水蒸気が偏西風に乗って、南シナ海の水蒸気を巻き込んで梅雨前線上を北上して日本各地に到達したという話を

聞いて、地球の大気圏内の気温の上昇が、いよいよここまで来たかという地球規模の異変を感じたものでした。西日本豪雨の翌月、台風21号が関西を縦断。関西空港が水没し、空港へ渡る橋が流されてきた大型船との衝突によって、通行不能となりました。

翌年の2019年、これまで全国各地を回って豪雨の被災地を目のあたりにしてきた自分自身が、とうとう「被災者」になってしまいました。9月、房総半島を縦断した台風15号です。最大瞬間風速60メートルの直撃を受けたのです。午前2時過ぎからいよいよ激しくなってきた風雨。ゴーゴーと渦巻く台風の中心から打ち出された石の塊のような衝撃。我が家に覆いかぶさるように張り出した人間の太腿ほどの木の枝をへし折りながら、60メートルの猛烈な風が、何度も屋根を打ちつけ、とうとう、自分で建て増した6畳の部屋の屋根を一瞬のうちに剥ぎ取っていったのです。直後に大量の雨。その真下に寝ていたため、あつという間にズブ濡れとなり、停電で真っ暗な闇の中、布団を引きずって母屋へと避難しました。この上、母屋の屋根が飛ばされたらと一瞬、心配が過ぎりましたが、最後は観念してこの成り行きにまかせるか

ありませんでした。この台風で風速60メートルを経験することになりました。もちろん自分にとって未知の体験でしたが、支笏湖での体験と合わせて、自然を知るには本当に良い経験となりました。台風15号の翌月、台風19号が房総半島に接近しました。再び直撃を受けたら応急処置の屋根が飛ばされるのは確実。何とか避けてほしいと願っていたら、お隣の伊豆半島に上陸。千曲川水系の洪水で長野新幹線の車両が水没。その後、北上して阿武隈川水系でもこれまでにない大規模な洪水が発生しました。

自分の住む千葉県も、19号と最後の21号台風でも各地で洪水が発生。千葉県は災害から守られているというこれまでの「神話」が吹き飛びました。そして、昨年、7月の熊本県球磨川水系での洪水。これだけ立て続けに繰り返される自然災害を前にして、この国の住人である私たちは、新型コロナ同様、自分たちが一方的な被害者であるという被害感情を強めてきました。でも、新型コロナによるパンデミックが、実は人間の側が引き起こしていたように、度重なる自然災害も、その原因を作っていたのが、ほかならない私たち現代人であることを気付かせようと、地球が送っていた「メッセージ

「ジ」だと悟らなければなりません。自分がそう感じるようになったのは、房総丘陵に移住してからの農作業体験からでした。1990年代に入ってから次第に気候が不安定になる中で、それまでに経験したことの無い気候現象が起こるようになりました。

ひと月近く全く雨が降らず、田んぼの水が干上がり、田の底がヒビ割れて稲が枯れそうになったり、逆に、ひと月分の雨が一度に降って、田んぼからあふれ出し、畔が決壊してしまったり、天日干ししていた稲束が、あまりの長雨に、とうとう芽が出てしまったりと、気候が目まぐるしく変化する中で、ずい分、気を揉むようなことが多くなりました。

ところが、それまで天候のせいにしてきたのが、ある時から、こうした現象は実は地球からの「メッセージ」ではないかと思うようになったのです。そう思うようになってから、自分の周りで起こる様々な自然現象を受け入れることができようになったのです。

年々厳しさを増す夏の暑さ。ここ数年、暑さの厳しい時には、頭から水を被って何とか凌いできましたが、人間以外の生きものたちも、みんなこの暑さをまともに受けて苦しんでいると感じるよ

うになりました。もちろん我が母なる地球も！

人間社会では熱中症の危険を繰り返して警告していますが、その人間が母なる地球を熱中症に罹らせてしまったのです。

産業革命後の200年、なかならず、グローバル経済が世界中をマーケットにしようとしてきたここ数十年の間、私たち人間は、地球が数億年かけて地底に蓄積してきた動物や植物などの死体の堆積物を見境もなく掘り出し、燃やし続け、あっという間に使い切ろうとしているのです。

その間、大気圏内の温度が一気に上昇し、その余分な熱を宇宙空間に排出して大気中のバランスを保とうとしていた地球の浄化能力を超えてしまったのです。

地球は私たちに熱の放出を控え、大気圏内の穏やかなバランスを取り戻すよう訴えています。自分の周りだけエアコンという文明の利器を使って「快適」な環境をつくり、凌ごうとするわたしたちに、母なる地球は、生態系の全ての生きものに目を向けるよう訴えています。

熱中症に罹った地球を治療するには、人間の熱中症と同じように、まずは安静にして、新たな熱の供給を断ち、冷やすこと。それには地球を熱している人間活

動にブレーキをかけることです。そして、地球のバランスが回復するところまで、人間活動をクールダウンしていくことです。

それがまさに、新型コロナウイルスによって実現したのです。新型コロナウイルスを防ぐため、世界中の人々が家に籠もりました。その結果、あっという間に地球環境が改善されました。

北インドのある都市では、半世紀ほどの間、分厚いスモッグで見ることのできなかったヒマラヤ山脈が、突然姿を現したのです。人間活動が停止したため大気が浄化されたのです。忽然と現れた純白の輝くヒマラヤ山脈に街の人々は息を呑み、思わず手を合わせたということがあります。街の人々に「自然感覚」がよみがえったのです。

こうした自然の浄化は、おそらく世界中で起こっていたと思われれます。そして、多くの人々に気付きを与えたことでしょう。でも、既成社会の支配者は、以前の経済成長路線に引き戻そうと躍起になっています。その一方、新型コロナウイルスのパンデミックの中で、人間社会は「いのち」か「マネー」かの二者択一を迫られています。皮肉なことに私たちは、マネーの社会へ重心を移すたびに感染が拡大する

というジレンマに陥っているのです。

「いのち」を選びなさい！と新型コロナウイルスは教えています。そして、私たちに、大地にしっかりと根を張り、自然に根差した自給自足的な暮らしに戻って、もう一度やり直しなさいと諭してきます。その声ははっきりと聞こえてきます。今から36年前、東京を離れ、自然の中で農的な暮らしを始めたお陰です。その暮らしを通して、失いかけていた「自然感覚」を少しずつ取り戻すことができました。

そして、ようやく「地球の声」が聞こえるようになってきたのです。

その「地球の声」です。

「私はあなた方、人間のことをずっと気に掛けていました。ことにここ50年、60年の間、あなた方あまりに自然界のバランスを無視した活動によって、あなた方以外の生きものたちがどんなに辛い思いをしてきたことか。自然環境の急激な変化に晒され、それについていけなかったたくさんの仲間たちが、この惑星から姿を消していきました。もう私たちが地球の生きものを辛い目に合わせることはやめてください！」

横暴な振る舞いを止めないあなた方人間を、地球から排除することは簡単で

す。そうした声がたくさん聞こえてきました。でも、私たち地球は、あなた方人間が自己の行き過ぎた活動を改めることによって、この惑星が平和で、喜びにあふれた時代を迎えることができるよう見守っているのです。

地球に意識を向けてください。地球と波動を合わせてください。地球とひとつになってください。あなた方のご先祖たちがそうしていたように。地球と一体化すれば、あなた方人間は、全てに満たされた存在となれます。孤独や孤立に悩むことなど全くありません。これまでのように「幸せ」を求めて動き回ることはもう必要ありません。だってあなたはすでに完璧なのですから！あなた方はあらゆるものから自立した、真に自由な存在です。この宇宙でたったひとつの、何もにもかえ難い素晴らしい存在なのです。あなた方がいつとき、欲に目が眩んで突き進んできた結果、あなた方の次の世代の未来を奪うところまで来てしまっていたのです。危機一髪。危ないところでした。私が遣わした「新型コロナウイルス」を通して、そのことに気付いて本当に良かった！これからは新型コロナウイルスも含めて、地球のあらゆる生きものたちと仲良くしあわせに暮らしてってください。新型

コロナウイルスも、あなた方が再生してくれた豊かな自然に帰ることができます。地球の波動にシンクロした新しい「いのちの時代」へ向けて、一緒に歩んでいきましょう！」

我が母なる惑星、地球さんは、私たち現代人が直面している地球レベルの危機に気付いて、その危機を乗り越えるための暮らしに転換していくことを望んでいます。私たちが、新型コロナウイルスからの伝言に気付けなかったら、地球はもっと強烈な「メッセージ」を送ってくることは間違いありません。大脳皮質の上っ面だけを使って、情報社会にどっぷり浸かったままの私たち現代人を震撼させるような！生きものとしてのリアリティを一気に取り戻すためのハードなメッセージを！

多分、それは「食べ物」だと思っています。気候変動がますます激しくなると、食べ物が増えなくなるような事態です。そうした事態を招かなくてもよいよう、自然界に対する破壊的な介入を即刻止め、人間が壊し汚した自然を再生し、生命の循環が元に戻る方向へ私たち現代人の暮らしを転換していけばよいのです。その時、自ずと私たちの暮らしのスタイルが決まってきます。この国がかつて2

60年にわたって続けていた完璧な物質循環の暮らし。そう、江戸時代です。幕末、当時の人々は欧米列強に伍するため、奇跡のような循環型社会を放棄してしまいました。それを復活するのです。当時に比べ圧倒的に「進化」したテクノロジーを、その復活のために使うのです。より少ないモノと、より少ないエネルギーを大切に使用して。複雑な方向に針が振り切れた現代社会から、人間の身の丈に合った、質素な、でも最大限しあわせな日常。衣・食・住・エネルギーを地元で自給できる暮らし。自立した地域の中を大切なツールとして回るおカネ。人と人、人と自然とが気持ちよくつながった地域社会。

シンプルイズベスト！

スモールイズビューティフル！

そうした新しい社会を迎えるために、この荒み切ったマネー社会を終わりにしましょう。どちらにしてもこの社会は自己崩壊していくのですが、次の時代を担う若者たちが、なるべく苦労しないよう、混乱の極みに達する前に、大人の世代が気付いて、若者たちと共に、次の「いのちの時代」を迎える準備（物質的なレベルより心のレベル）に取り掛かれら素晴らしいです。

そのための第一歩が、自分の波動を地球の波動に合わせる。スピリチャル系の人が良く口にする「アセンション」。今、地球が次元上昇をしていて、その波動の変化についていけない人から先に取り残されていく、という話です。なんだからスピリチャル系の人たちだけが生き残れるというニュアンスですが、心配無用です。難しいことは分からなくても、人間以外の全ての生きものがそうしているように、ただただ、地球の波動に自分の波動を合わせる、というよりも、完全に自立した、自由な存在でいられれば、自己の枠を超え、自分を包む世界、地球とひとつになれるのです。地球と一体であれば、地球がどんなに変わろうとも何の問題もありません。合わせようと思えしなくてよいのです。そのままよいのです。そうしていれば、自分にとって本当に必要なものが見えてきます。あとはそれを大切にしていだけ。自分の「いのち」にひたすら向き合ってください。

最後にワクチンについて。

新型コロナには当初から、今いちリアリティを感じられないところがありました。ワクチンについても同様です。私たち現代人を新型コロナウイルス感染症のパンデミックのループに引きずり込みな

がら、不安と恐怖を煽り、ワクチン接種へ追い込んでいく。発生する膨大な利権。人間の歴史で最大の実験が行われています。その一方で、ワクチンの副作用を恐れる人もたくさんいます。打つべきか？ 打たざるべきか？ どちらが安心できるのか？

自分自身に関して言えば、ワクチンは打ちません。もし、感染したらコロナと一緒に「経過」を味わいます。コロナがこちらの体を出ていくまで。自然の成りに任せてを任せるだけです。新型コロナに限らず、この混乱の時代を生き抜くには「覚悟」が必要です。それさえしっかりしていれば、何が起ころうと右往左往することはありません。大地にしっかり足を着け、全てを地球に委ねるだけです。

(2021年4月15日・オンライン講演会)

筆者略歴(やまかわ ゆきお)

1943年東京生まれ。1985年フジテレビを退社後、自然の中で暮らしたいという夢の実現のため都会での全てを捨て、南房総の里山の麓の古い民家に落ち着く。